不定期刊行　　第539号　2015.03.15

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
大町高等学校

酒井耕先生の慰霊と雪崩学習・イグルー作り体験

１９８９年３月１８日、県山岳センターの高校生冬の野外生活研修会に参加中の松本蟻ケ崎高校教諭酒井耕さんが雪崩により、亡くなった。その慰霊と、雪崩の学習という観点で計画された松本深志高校山岳部の計画に参加させてもらった。今回は深志、大町北、大町の三校の合同学習会という形になった。その他に、当時雪崩に埋まり九死に一生を得た赤羽康定さん、勤労者山岳会の中山建生さん、酒井さんと高校同期でＮＨＫカメラマンの米山悟さん、深志山岳部ＯＢ会の植松晃岳さんが参加し、総勢３０名ほどになった。

現場に到着後、酒井さんが亡くなった場所を望める尾根上に祭壇を設け花などをお供えし、酒井さんのご冥福と事故の再発防止を祈り全員で黙祷をした。雪崩事故を風化させず、教訓として語り伝えていくことが酒井さんの死を無にしないことである。深志顧問の西牧さんの当時の事情説明。赤羽さんからは、足からすくわれる感じで斜面全体が流れたこと、それまで聞いていた「泳ぐようにもがけ」などということがまったくできなかった（意味がなかった）こと、救出されたのち失った意識が回復する中で感じた不思議な感覚など、当時者だけが知る貴重なお話をお聞きした。雪崩研究者の中山さんは、雪崩事故は「斜面角度、樹木が生えていない、上部に吹き溜まりがある（雪庇がある）」点に注意し、狭い斜面に大勢で踏み込まないという鉄則を守れば、８０％以上は防げると強調された。その後は、コンプレッションテスト、転倒による斜面のズレの体験、ビーコン捜索などいくつかのグループに分かれて体験をした。

今回のもう一つの内容は、イグルー作りである。大学時代から冬山にはテントを持って行かないということを実践してきたイグルー作りのエキスパート米山さんに指導していただいた。作る場所は尾根上の斜面の角度が変わるような場所がベストとのことだったが、偶然立っていたその場所で、「これからここに３０分で２～３人用のイグルーを作ります」と宣言した米山さんは、自分の立っているところを中心に半径１ｍほどの円を描くと、普通のノコギリとスコップを使って本当に３０分でイグルーを完成させてしまった。見事だった！要領は、踏み固めた自分の足元をノコギリでブロック状に切り出し、それを囲んで積んでいくという方法。最初の２段くらいは大きなブロックが有効だ。３段目くらいからは、ブロックできるだけ細長い形に切り出し、円に内接する多角形になるようショートカットして載せ、次第にアーチ形を形成していく。間に隙間があっても気にしない。要は、ブロックの切り出しだ、この具体的な様子は、雑誌「ＰＥＡＫＳ」３月号に米山さん自身が書いている（web でも見ることは可能）ので、気になる向きはそちらを参照願いたい。講師による見事な手際を見せられたあと、早速全員が挑戦する。この作り方は小生も初挑戦である。さすがに３０分というわけにはいかなかったが、それでも１時間で作り上げることができた。

僕の作ったイグルー

生徒作イグルー群　　こういう斜面の変わり目が適地

大町高校は僕も含め５人が挑戦し、４個が完成、残念ながら１個は完成間近で崩れてしまった。しかし、初挑戦でこれだけできるということに一同感激。雪洞より時間が早い、しかも作業も楽。３月末の大町高校山行では、他の部員にも伝授したいと思う。

山岳県などと言っていられない

今回のイグルー作りは期せずして３校合同技術研修の体をなしたが、長野県では、春の県大会（南信のみ地区大会も実施）、秋の地区新人戦のみが高体連の公式な行事のすべてであり、それ以外に生徒・顧問が公的に集まるような機会はない。5 月に針ノ木雪渓で行われる山岳センターの高校生研修会も、かつては参加制限を設けたほど盛況であったが、近年は参加校が固定化し、参加者も 20 名程度。秋口に中信高体連と中信安全登山研究会が共催する顧問・生徒の研修交流会もここ数年は参加数が減ってきている。県内の研修会といえば、ほかには前々号で紹介した南信地区のそれを見るのみで、それ以外には高校生、顧問ともに技術を磨いたり、交流を深めたりするような機会はない。

ならば、各学校は独自に活発な活動をしているのかと言えば、これも全くお寒い状態というのが実際のところである。昨夏から秋にかけて多くの学校に協力願った「全国山岳部アンケート」（このアンケートの分析は 3 月に発行になる国立登山研修所の紀要「登山研修」で第一弾を公表する）の結果を纏めてみたが、年間の登山日数や月ごとの山行回数などを見ると、長野県の山岳部は、他県に比べて、冬眠状態になるクラブや年間を通して活動が組まれていないクラブが多かったように思う。その理由はやはり顧問にあるというのが、残念ながら僕の考えである。顧問の高齢化も進んでおり、このままでは、早晩長野県から山岳部がなくなってしまうのではないかという危惧を抱く。

その一方で山岳部員の数は、特定の学校に集中するという偏りはあるものの、この数年全体としてはむしろ増えている。そう考えれば、暫定的対策としては校数は少なくても生徒を集められる学校への集中的な顧問の配置、抜本的には顧問の育成が急務である。一番は、山岳部を経験した教え子がゆくゆく高校教師として育ってくれるのがいいのだが・・・。2002 年 3 月にはじめたこの「かわらばん」も 13 年になる。最初からこの思いは強かったのだが、自分の先行きも見えてきた今、さらにそれを強く感ずる。

長野県山岳協会の事務局には、いくつかの県から岳連（協会）の機関紙が届く。高体連はどこも加盟団体の一つなので、時々紙面にその情報が載せられている。長野以外の都道府県の高体連が、ＩＨ予選以外にどのような活動をしているかは意外と知らないのが実情だ。先日届いた兵庫岳連のニュースには、積雪期登山大会の報告（桑田克治兵庫県高体連登山専門部専門委員長記録）があった。そこから抜粋、リライトして紹介したい。冬の雪山でもこれだけの活動をしていることをご紹介することで、長野の危機的な状況を知っていただければと思う。

（以下大西抜粋リライト）1 月 3 日～6 日まで氷ノ山及び氷ノ山国際スキー場で第 58 回兵庫県高体連積雪期登山大会が開催された。参加は 10 校から顧問 25 名、男子 93 名、女子 25 名の計 143 名。3 日は顧問会議。3 日は夜に顧問会議をもち、積雪の多い状況に鑑みて登山目標を一ノ谷休憩所までと変更することを決定。4 日は午前 7 時前に集合、開会式後、7 時過ぎに出発。下部の登山道も新雪が多かったが、高校生のパワーで快調に進む。逆水で十分なトイレ休憩を取った後、東尾根登山口から急登に取り付き、テープを頼りに夏道を探しながら登る。ルートはわかりにくく、所々胸まであるラッセルにびっくりしながらも、ラッセルを交代しつつ高度を上げ、東尾根避難小屋に 9 時半には到着した。ここからは、K高校が尾根筋のラッセルを引き受け、ルート工作を行った。大段の急登もステップを切り、大人数が通りやすいトレースを作ってくれたので、後続の学校はスムーズに進んだ。10 時半過ぎに一ノ谷休憩所に到着し、昼食休憩を取る。稜線は思ったより固まっていたが、大所帯なので、ここで引き返すことにする。急斜面にそりのコースを造って雪に触れあう者達もいた。（以下省略）

というような具合である。このような公的な大会という位置づけがないような場合、顧問同士が横の連携を取り合う中で、今回の３校合同のような合宿・訓練がもっと仕組まれてもいいのではないか？特に冬山などではそれが有効だと改めて感じた次第。